

題と

き方～

世界には、「女性である」という理由だけで学校に通えなかったり、小さい頃から家事労働をしなければならなかったりする女性がいます。また、宗教的観点から見ても、男女差別が根強く残っている地域も多くあり、女性が自分らしく生きることはもちろん、自由に発言することもできない、その権利を知らない女性がいる現実があります。

2016年12月より単身ミャンマーへ渡り、JICAシニア派遣員として活動している工藤睦美さんの、ミャンマーについての報告を軸に、開発途上国のジェンダー問題と、今のわたしたちの生活について教育の機会の観点から考えてみたいと思います。

CHANGE!!

チャンスやサポートで生き方を変えよう!!

働き方

工場の女性労働者は、男性の獲得する収入の70～90%しか得ておらず、女性の75%は福利厚生を受けることができない非正規労働に従事。経済の屋台骨でありながら、ほとんどサポートを受けていない。

→ 国内のサポートをしっかりと整えていくこと、男性の理解を得ることが、経済発展につながっていく。

教育の機会

女の子の学習機会は、雇用機会を生み、貧困から抜け出すきっかけをもたらす。

生き方の選択

女性が自分の意思で人生を選んだり、困難な状況を変える力を身に付けることは、その下に続く世代の子どもたちも自分らしく生きることにつながる。

コラム

宗教・慣習

まだまだ根深い差別が残る。生理中の女性が穢れ(けがれ)だとする「チャウパディ」という風習があり、生理中は家の中に入ることも許されない。

→ ネパールでは12月19日、ヒンドゥー教の古い慣習に従って、生理中に小屋に閉じ込められた15歳の少女が死亡した。

世界ではこんな問題が起きている

「女の子にお金をかけるのは、他人の庭に水をやるようなもの」

ネパールにはそんなことわざがあります。

現在、世界の貧困人口の6割、また非識字人口の3分の2が女性だと言われています。学校に行けるのは男の子優先で、学校に通えません。それはなぜか？女の子はその家を継ぐわけではなくからです。古い習慣により10代で結婚させられる女の子たちは、教育の機会を奪われます。また、女の子はお嫁に行くのにもお金がかかる(結婚持参金)という理由で、生まれる前に命を絶たれることもあるのです。10代での妊娠、出産を強いられることで、命を落とすケースもあります。

女性は、家事、育児、介護など、収入にならない労働に従事し、農地や家畜などの生産資源を相続、所有することができない傾向にあります。そのため、家庭内での発言力が弱まっています。

わたしたちの生活と世界の問題

日本はどうでしょう？男女平等に

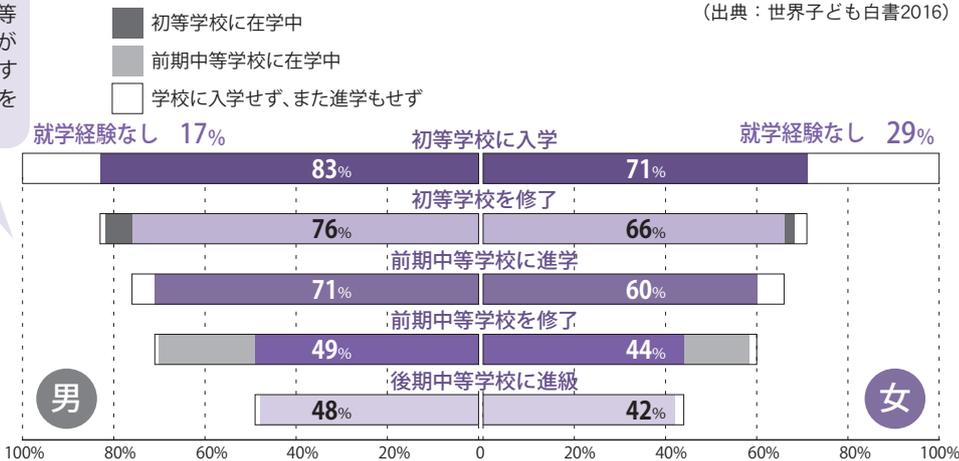
生まれ、男女平等に教育を受けることができている。しかし、ケア役割を押し付けられることがあったり、そのためにやりたいことをあきらめたり、キャリアを断絶するような機会は、やはり女性の方が多いのが現状です。また、学歴はあっても職業スキルがないために雇用のチャンスが少なく、貧困から抜け出せないという現実。開発途上国も日本も同じであると言えます。お金を稼ぐ力をひとりひとりが持つことは、発言権を持つ上で、とても大切なことです。

女の子の就学率が高いほど、国のGDP(国内総生産)が上がるとい報告があります。女の子への教育が、生存率を上げるとい報告もあります。女性への教育が、開発途上国の未来を変える。誰もが自分らしく生きていくために、平等な教育は必要不可欠なのです。

(参考)公益財団法人 プラン・インターナショナル・ジャパン

例：ナイジェリアにおける青少年の教育的達成度(2013年)

(出典：世界子ども白書2016)



開発途上国のジェンダー問題 わたしたちの生活 ～教育と女性の生



シニア海外ボランティア JICA ミャンマー派遣員 工藤 睦美さん

戸田市出身。20代の頃、2年間ケニアでボランティア。その後帰国し高校教諭として働く。子どもが成人したことを機に、JICAシニア海外ボランティアとして2016年12月から知的障害児・障害者の支援のためにミャンマーに派遣されている。

ミンガラバー
မင်္ဂလာပူ

工藤さんからの現地レポート マンダレーからこんにちは！

ミャンマーと聞いて、その場所を想像できる人はどれくらい？私の頭に浮かんだのは、ビルマ、アウンサンスーチーだけでした。そんな未知の国ミャンマーにやってきて、12月6日、ミャンマー第2の都市であるマンダレーに赴任しました。

毎朝9時に学校へ着いて、「ミンガラバー！（おはよう！）」派遣されている学校は、ミャンマーで2つしかない政府の特別支援学校です。職員は全員で15名。校長先生をはじめ、ほとんどが女性です。男性はアシスタント教員が1名と、警備のおじいさんが1名です。ミャンマーで生活を始めて2か月、一番苦しいのは言葉、そして食べ物・水です。街で見かけるミャンマー女性の印象はとても働き者で、喫茶店でお茶を飲んで四方山話をしているのは男性が多いです。

私がミャンマー語を習っているピョーピョー先生（女性）の話から、ミャンマー女性についてご紹介します。

- ①ミャンマーでは仕事に関して男性・女性の差別はなく、興味によって仕事を選ぶことができる。仏教施設では女性禁制の場所があり、女性は近寄ることができない。
- ②大学では女性の割合が高く、医学部やエンジニアも女性が多い。
- ③ミャンマーは名字を持たないので、生まれる子どもは男性・女性の性にとらわれない。
- ④働く女性が多くなった。昔は家族に一人働き手があれば生活できたが、今は買いたいものがたくさんある。子どもの教育費（塾の費用）が高く、親は学校や塾へ送り迎えをしている。少子化の中で、親は子どもを大切にしている。

ミャンマーでは両親のことを、「ミバ」と言います。
ミ=母、バ=父なので、母父です。
母たちは、暑い太陽のもとで今日も元気です。

ミャンマー連邦共和国 基礎データ

- ・首都：ネーपीドー
- ・通貨：チャット (Kyat)
- ・公用語：ミャンマー語
- ・人口：5,142万人
- ・宗教：仏教 (90%)
- ・ASEAN加盟国
- ・ジェンダーギャップ指数：ランク外 (日本は111位)
- ・主要産業：農業

東南アジアのインドシナ半島西部に位置し、国土は南北に長い。1年を通して高温多湿である。多民族国家であり、ビルマ族が人口の6割を占めるが、少数民族も多い。

(参考：外務省ホームページ)

編集スタッフより

ミャンマーは、後発開発途上国にも関わらず少子化が進んでいる珍しい国です。出生率が低下している原因として、女性の未婚率の高さが指摘されており、未婚率が高い一因として女性の高学歴化が指摘されているようです。

そして、キャリアを積んで働いていける環境があっても、ライフステージの選択のなかで仕事を辞めてしまう女性が多いという点は、日本と似通った部分かもしれないと感じました。

「男は仕事、女は家庭」という日本で浸透していた固定概念や価値観は、世界すべてがそうであるわけではないことにも気付きます。それぞれの国にそれぞれの価値観があり、多様な価値観のなかで女性が置かれている状況もさまざまですが、どの国においても、個人の個性や能力を認め合い、自分らしく生きていける環境をつくっていかなくてはなりません。そのために、教育の機会の平等はとて大きな意味をもつのではないのでしょうか。